

# サッカーパフォーマンスと選択反応時間及び生物学的成熟度の関係

三好健夫<sup>1)</sup> 広瀬統一<sup>2)</sup> 福林徹<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>早稲田大学大学院人間科学研究科

<sup>2)</sup>東京女子体育大学

<sup>3)</sup>早稲田大学スポーツ科学学術院

キーワード: TDS、選択反応時間、生物学的成熟度、成長期サッカー選手

## 抄録

スポーツのパフォーマンスレベルと反応時間には関係があると言われている。また、反応時間の1つの規定因子である中枢での情報処理能力は成長期に発達するが、成長期には成熟度の個人差が大きく現れるため、この成熟度の個人差が中枢情報処理能力の発達に影響すると考えられる。本研究はパフォーマンスレベルにより選択反応時間が異なること、および、生物学的成熟度と選択反応時間の関係を明らかにすることを目的とした。方法は10～12歳の某Jリーグ下部組織に所属する男子サッカー選手(S群)、S群に比して競技レベルの劣る一般的なサッカーチームに所属するサッカー選手(LS群)、および一般児童(NS群)を対象とし、Talent Diagnose System(TDS、KEG社製)を用いて選択反応時間を測定した。さらにS群とNS群の生物学的成熟度を評価するため身長成長速度曲線を持ちいて、Phase分けを行なった。その結果、サッカー熟練者群は、非熟練者群およびコントロール群と比較して、有意に速い反応時間を有していた。また、手足の協調運動や足の運動といったサッカーの競技特性であると考えられる運動の選択反応時間においても、熟練者群はコントロール群より有意に速かった。

一方、本研究では、生物学的成熟度と選択反応時間の間には明らかな関連は見られなかった。

スポーツ科学研究, 2, 128-136, 2005年, 受付日:2004年10月19日, 受理日:2005年12月12日

連絡先: 三好健夫、〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-679-15 早稲田大学人間科学研究科

Tel/Fax: 04-2947-6930、e-mail: [tm\\_revolution21@ruri.waseda.jp](mailto:tm_revolution21@ruri.waseda.jp)